まざあ・ぐうす

北原白秋訳

日本の子供たちに

はしがき

お母さんがちょうのマザア・グウスはきれいな青い空の上に住んでいて、大きな美しいがちょうの背中にのってその空を翔（か）けったり、月の世界の人たちのつい近くをひょうひょうと雪のようにあかるくとんでいるのだそうです。マザア・グウスのおばあさんがそのがちょうの白い羽根をむしると、その羽根がやはり雪のようにひらひらと、地の上に舞（も）うてきて、おちる、す

ぐにその一つ一つが白い紙になって、その紙には子供たちのなによりよろこぶ子供のお唄が書いてあるので、イギリスの子供たちのお母さんがたはこれを子供たちにいつも読んできかしてくだすったのだそうです。いまでもそうだろうと思います。それでそのお話をお母さんからうかがったり、そのお唄を夢のようにうたっていただいたりするイギリスの子供たちは、どんなにあの金(きん)の卵をうむがちょうや、マザア・グウスのおばあさんをしたわしく思うかわかりません。

ですが、ほんとうをいえば、そのマザア・グウスはやはりわたくしたちと同じこの世界に住んでいた人で

した。べつにお月さまのお隣の空にいた人ではありません。子供がすきな、そうして、ちょうどあのがちょうが金の卵でもうむように、ぼっとりぼっとりとこの御本の中にあるような美しい子供のお唄を子供たちの間におとしてゆかれたのでした。ありがたいお母さんがちょうではありませんか。

　そのグウスというおばあさんはいまから二百年ばかり前に、その当時英国の植民地であった北アメリカにうまれたかたでした。そのおばあさんに一人のちっちゃなまご息子がありました。おばあさんはそのまご息子がかわゆくてならなかったものですから、その子

をよろこばせるためにその子のよろこぶような、そうしてその子の罪のない美しいお夢をまだまだかわいいきれいな深みのあるものにしてやりたいのでした。それでいろいろなおもしろいお唄をしぜんと自分でつくりだすようになりました。やっぱりその子がかわいかったのですね。

それも初めはただなんということなしに節をつけておはなししたり、うたったりしたものでしょうが、そうしたものはどうしても忘れやすいものですから、また覚え書きに書きとめておくようになりました。そうなるとまた、そうして書きとめておいたのが一つふえ

二つふえしていつかしら一冊の御本にまとまるようになったのでしょう。

　そのおばあさんの養子にトオマス・フリイトという人がありました。この人は印刷屋さんでした。で、そのお母さんが自分の息子のためにうたってくだすった、そうしたありがたいお唄を刷って、自分の息子ばかりでなく、ほかのたくさんの子供たちをよろこばしてやりたいと思ったのでした。それでこのマザア・グウスの童謡の御本がはじめて刷られて、ひろく世間によまれるようになりました。それは西洋暦の千七百十九年という年で、時のイギリスの王さまはジョウジ一世と

もうされるおかたでした。

で、このマザア・グウスの童謡はずいぶんと古いものです。古いものですけれど、いつまでたっても新しい。ほんとにいいものはいつまでたっても昔のままに新しいものです。考えてみてもその御本がでてから、イギリスの子供たちはどんなにしあわせになったかわかりません。その子供たちがおとなになり、またつぎからつぎにかわいい子供たちがうまれてきて、またつぎからつぎにこのお母さんがちょうのねんねこ唄をうたって大きくなってゆくのです。それにこの御本がでてからしあわせにされたのはそのイギリスの子供ばか

りではありません。イギリスのことばをつかっている国々の子供はむろんのことですが、世界じゅうのいろいろな国のことばに訳されていますので、そうした国々の子供たちもみんなしあわせにされているはずです。それにいろいろ作曲されて、ずいぶんひろくうたわれているようです。ですから、赤いくちばしと赤い水かきとをもったがちょうのおばあさんがおいすに腰かけて、おなじような赤いちっちゃなくちばしと赤いちっちゃな水かきとをもったちっちゃながちょうをおひざにのっけて、赤い御本をひらいている画（え）のついた表紙のや、三角帽（さんかくぼう）のリボンに鵞（が）ペンをさしたおばあさ

んがテエブルの前に腰をかけて、なにか書いていると、そのそばから大きながちょうがくちばしをあけて、針の頭のように眼（め）をちっちゃくしてのぞきこんでいる画のや、がちょうとおばあさんが空を翔（か）けているのや、緑色（みどりいろ）の牧草（まきぐさ）の中に金の卵をおとしている白いめんどりのがちょうのや、いろんな本がでています。

日本ではこのわたしのが初めてです。日本の子供たちのために、わたしはこのお母さんがちょうを日本の空の上にきてもらいました。そうして空からひらひらとその唄のついたがちょうの羽根をちらしてもらったのでした。その羽根にかいてある字はイギリスの字で

すから、わたしは桃色のお月さまの光でひとつひとつすかしてみて、それを日本のことばになおして、あなたがた、日本のかわいい子供たちにうたってあげるのです。そしてみんなうたえるようにうたいながら書きなおしたのですからみんなうたえます。うたってごらんなさい。ずいぶんおもしろいから。

　その童謡の中には、青い萌黄色（もえぎいろ）の月の夜（よ）のお月さまをとびこえるめうしのダンスや、紅（あか）い胸のこまどりが死んで白嘴（しらはし）がらすがお経をよむのや、王さまの前のパイのお皿からうたいだす二十四匹の黒つぐみや、「パンにおせんべい」とうなるロンドンのお寺の鐘や、お

うちが大火事でプッジングのおなべの下にもぐりこむてんとうむしのむすめや、赤いにしんにのまれるくろんぼうの子供や、かごにのって青天井（あおてんじょう）のすすはきしにお月さまより高くのぼるおばあさん、おくつの中に子供をどっさりいれてしまつにこまるおばあさん、挽割麦（ひきわりむぎ）を三斤（さんぎん）ぬすんでお菓子をこさえる王さまや、拇指（おやゆび）よりもちいさな豆つぶのだんなさま、赤いおわんにのって海へでるおりこうさん、気ちがいうまにのってめちゃくちゃにかけてゆく気ちがいの親子、そうした、それはもうどんなに不思議で美しくて、おかしくて、ばかばかしくて、おもしろくて、なさけなくて、

おこりたくて、わらいたくて、うたいたくなるか、ほんとにゆっくりとよんで、そうしてあなたがたも今までよりもずっとかわったお月夜の空や朝焼け夕焼けの色どりを心にとめて、いつも美しいあなたがたのお夢を深めてくださるよう。そうならわたしはどんなにうれしいかわかりません。

　この本の中の童謡はおもにそのマザア・グウスから訳したのですが、そのほかにもイギリスやアメリカの子供のうたっているので違ったのがたくさんつけたしてあります。いろんな指あそびや、顔あそび、めくら鬼、はしご段あそびなど、日本のとちがった遊戯唄を

おしまいのほうにのせてみました。皆さんでひとつやってくださるとうれしいと思います。

これからもまだいろんなものを皆さんのために書いてお贈りしたいと思っていますが、わたしもこれからほんとに念をいれて、がちょうが金の卵をうみ落とすように、ほんとにいい童謡をぽつりぽつりと落としてゆきたいと思います。

では、どうぞ、この本の初めにあるその金の卵の歌からよんでいってください。するときっとがちょうがあなたがたを背中にのせて、高い高いお月さまのそばまで翔けてゆくでしょう。

大正十年九月

木兎の家にて

白秋しるす

序詩

マザア・グウスの歌

マザア・グウスのおばあさん、
いつもであるくそのときは、
きれいながちょうの背にのって、
空をひょうひょう翔（か）けてゆく。

マザア・グウスのすむ家（いえ）は、
一つ、ちんまり、森の中、
戸口にゃ一羽の梟（ごろすけ）が

みはりするのでたっている。

むすこがひとりで名はジャック、
その子まずまずお人よし、
ずんとよいことせぬ代わり、
するいわるさもようしえぬ。

市場へジャックをやったれば、
めすのがちょうを買ってくる、
「まあまあ、お母さん、みておいで、
そのうちいいこともあるでしょよ」

それからがちょうのめすとおす
なかよしこよしであそんでる。
いつもいっしょに餌（え）をたべて、
ガアガア、お池におよいでる。

ある朝、ジャックがいってみりゃ、
（ほんに話によくきいた）
金の卵がありまする。
うんでくれたはめすがちょう。

金の卵だ、はよ告（つ）げよ、
ジャックはお母さんへとんでゆく。
お母さんもほくほくごきげんだ。
「それはよかった、おおできじゃ」

ジャックは卵をうりにでる。
それをかおうと猶太人（ジュウ）の悪（わる）者、
おもう半値もつけないで、
うまうまジャックをちょろまかす。

ジャックはお嫁とりにゆきまする。

むこうのおじょうさん華美（はで）好きで、
それはかわいい、うつくしい、
花の山査子（さんざし）、百合（ゆり）みたよう。

ところへ、あとからつけまわす
猶太人（ジュウ）とおしゃれのおべっか屋、
脇腹（わきばら）めがけて、ぶってやろと、
かわいそなジャックにつっかかる。

そのときすばやく、すっときたは、
マザア・グウスのおばあさん、

杖(つえ)でジャックをちょいと打ちゃ、
道化の＊ハアレクインにはやがわり。

つづいて、おばあさんが杖あげて、
きれいなおじょうさんをちょいと打ちゃ、
すぐにその子もはやがわり、
それこそかわいい＊＊コランバイン。

金の卵は海の中、
どさくさまぎれにほうられる。
だけど、ジャックがとびこんで、

またももとへととりかえす。

それで、めすがちょうとった猶太人（ジュウ）のやつ、
ころしちまえといきまいた、
割（さ）いて、こいつを売っとばしや、
ポケットにたんまり金もうけ。

ジャックのお母さんは、それみると、
すぐにがちょうをひったくり、
そして、その背にうちのって、
お月さまめがけてとんでいった。

＊　ハアレクイン。道化芝居（しばい）の男役です。

＊＊　コランバイン。これは女役です。

まざあ・ぐうす

こまどりのお葬式（ともらい）

「だァれがころした、こまどりのおすを」
「そォれはわたしよ」すずめがこういった。
「わたしの弓で、わたしの矢羽（やば）で、
わたしがころした、こまどりのおすを」

「だァれがみつけた、しんだのをみつけた」
「そォれはわたしよ」あおばえがそういった。
「わたしの眼々（めめ）で、ちいさな眼々で、

わたしがみつけた、　その死骸(しがい)みつけた」
「だァれがとったぞ、　その血をとったぞ」
「そォれはわたしよ」　魚(さかな)がそういった。
「わたしの皿に、　ちいさな皿に、
わたしがとったよ、　その血をとったよ」

「だァれがつくる、　経帷子(きょうかたびら)をつくる」
「そォれはわたしよ」　かぶとむしがそういった。
「わたしの糸で、　わたしの針で、
わたしがつくろ、　経帷子をつくろ」

「だアれがしるす、　戒名（かいみょう）をしるす」
「そオれはわたしよ」ひばりがそういった。
「あかるいならば、くれないならば、
わたしがしるそ、　戒名をしるそ」

「だアれがたつか、　お葬式（ともらい）にたつか」
「そオれはわたしよ」おはとがそういった。
「葬（ともら）ってやろよ、　かわいそなものを、
わたしがたとうよ、　お葬式にたとうよ」

「だアれがほるか、　お墓の穴を」
「そオれはわたしよ」ふくろがそういった。
「わたしの鏝（こて）で、　ちいさな鏝で、
わたしがほろよ、　お墓の穴を」

「だアれがなるぞ、　お坊（ぼう）さんになるぞ」
「そオれはわたしよ」白嘴（しらはし）がらすがそういった。
「経本（きょうほん）もって、　小本（こほん）をもって、
わたしがなろぞ、　お坊さんになろぞ」

「だアれがならす、　お鐘をならす」

「そォれはわたしよ」おうしがこういった。
「わたしはひける、力がござる、
わたしがならそ、お鐘をならそ」

空(そォら)の上からみんなの小鳥が、
ためいきついたりすすりなきしたり、
みんなみんなきいた、なりだす鐘を、
かわいそなこまどりのお葬式(ともらい)の鐘を。

お月夜

へっこら、ひょっこら、へっこらしょ。
ねこが胡弓（こきゅう）ひいた、
めうしがお月さまとびこえた、
こいぬがそれみてわらいだす、
お皿がおさじをおっかけた。
へっこら、ひょっこら、へっこらしょ。

天竺（てんじく）ねずみのちびすけ

天竺（てんじく）ねずみのちびすけは、
ちびだからふとっちゃいなかった。
いつもあんよでおあるきで、
たべるときゃ断食（だんじき）やいたさない。

さてそこらからかけてでりゃ、
けっしてそこにはもういない。
きけば、かけてるそのときは、

どっちみちじっとしちゃいないそだ。

キイキイなくのは常々（ふだん）だ、めちゃくちゃあばれもたまたまだ。

それがさわいでわめくときゃ、けっしてだまっちゃいなかった。

たとえねこからおそわらなくとも、

はつかねずみがただのねずみでないのは御承知だ。

ところでたしかなうわさだが、

ある日、ひょっくり気がふれて、奇態な死に方した話。

とても勘(かん)のいい、金棒引(かなぼうひ)きの人たちは、きゃつめおっ死(ち)んだで、いきてるわけないぞといっている。

木のぼりのおさる

木のぼりのおさるさん、
おちたときや、そのときやおちていた。
石(いイし)の上(うウえ)のつんがらす、
飛(た)ったときや、そこらにや影もない。
りんごかじりの婆(ばば)おかみ、
二つたべたときや、一対たべていた。

水車場（すいしゃば）がよいの小荷駄（こにだ）うま、
てくるときゃ、　じっとたっちゃいなかった。
拇指（おやゆび）ちょんぎったうしころし、
けがしたそのときゃ、　血をだした。
かけっこしてゆくお供（オとも）さん、
はやがけするときゃ、　かけあしだ。
おくつそそくるくつなおし、

つくろっちゃったそのときゃ、しあげてた。
ろうそくつくるがろうそく屋、
型からひっぱいだときゃ、手にもってた。
スペインさしていった艦隊（かァんたい）、
かえったときゃ、またぞろやってきてた。

くるみ

ちいさな緑のお家（うち）がひとつ。
ちいさな緑のお家の中に、
ちいさな金茶のお家がひとつ。
ちいさな金茶のお家の中に、
ちいさな黄色いお家がひとつ。
ちいさな黄色いお家の中に、
ちいさな白（しイろ）いお家がひとつ。
ちいさな白（しイろ）いお家の中に、

ちいさな心（ハアト）がただひイとつ。

ボンベイのふとっちょ

ひとりふとっちょがボンベイにござった。
ある日、日なたでたばこのんでござった。
そこへ、ついときたはしぎという小鳥よ、
パイプひっさらってまたふいととんじまう。
そこでじれました、ボンベイのふとっちょ。

六ペンスの歌

うたえうたえ、六ペンスの歌を。
衣嚢（かくし）にゃごほうびの麦がある。
二十四匹（にじゅうしひき）の黒つぐみ、
焙（ほう）じこまれて、パイの中。

パイがはがれたそのときに、
すぐに小鳥がうたいだす。
もともと王さまにそなえます

きれいなお皿じゃ、そりゃないか。

『王さまは会計院で、
お金の御勘定。

おきさきゃお居間で、
パンと蜜をめしあがり。

女中さんはお庭で、
衣裳をせっせとほしている。

そこへ小鳥が一羽とんでまいって、
つんとはじきました、女中さんのお鼻』

一時

いっちく、たっちく、おうやおや。
ねずみが時計をかけあがる。
柱時計がチーンとうつ。
ねずみがすたこらかけおりる。
いっちく、たっちく、おうやおや。

卵

お乳のよに白い大理石の壁に、
絹（きぬ）の柔軟（しな）したうすい膜（かわ）つけて、
すいて凝（こご）った泉の中に
金のりんごがみえまする。
そのお城に戸一つないので、
どろぼうどもまでわりこんで金のりんごをぬすみだす。

朝焼け夕焼け

朝焼け小焼け、
ひつじかいの気がかり。
夕焼け小焼け、
ひつじかいの後生楽（ごしょうらく）。

風がふきや

風がふきや、
まわります、
粉ひき車よ。

風がやみや、
とまります、
粉ひき車さ。

文なし

一文なしの文三郎（もんさぶろう）、文三郎をさらおうと
どろぼうどもがやってきた。
にげた、にげた、烟突（えんとつ）の素頂辺（すてっぺん）へ攀（よ）じてった。
しめた、しめたとどろぼうどもがおっかけた。
それをみて文三郎、そろっとむこうへにげおりた。
こうなりゃみつかるまい。
かけた、かけた、十五日（じゅうごんち）に十四（じゅうし）マイル、
それで、ふりむいたが、もうだアれもみえなんだ。

ファウスト国手（せんせい）

ファウスト国手（せんせい）はいい人で、
時々、お弟子たちをひっぱたく。
ひっぱたいて、おどらして、追ったてて、
イギリスでてからフランスへ、
フランスでてからスペインへ、
そしてまた、ひっぱたいて逆もどり。

とことこ床屋さん

とこ、とこ、床屋さん、
ぶたの毛かっちょくれ、
鬘（かずら）がちょっくらいりようだが、
何本、その毛がありゃたりる。
二十四（にじゅうし）本でたくさんだ。
フンとお鼻でごあいさつ。

おくつの中に

おくつの中におばあさんがござる、
子供がどっさり、しまつがつかない、
おかゆばっかり、パンもなにもやらず、
おまけに、こっぴどくひっぱたき、
ねろちゅば、ねろちゅば、このちびら。

一つの石に

一つの石に小鳥が二羽よ。
　ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。
一羽がとんでった、一羽がのこった。
　ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。
また一羽とんでった、だァれもなくなった。
　ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

石だけぽっつりのォこった。たったひとりのォこった。
ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

コオル老王

お年寄りのコオル王は愉快なお爺（じっさ）、
愉快なお爺（じっさ）、
すぐにパイプめして、お酒杯（さかずき）めしてね、
そして胡弓（こきゅう）ひきを三人ほどおめしで。
どれの胡弓ひきもよい胡弓もちでよ、
中で一番なは王さまの胡弓よ、
ツウイ・ツウイズル・デイ、ツウイズル・デイ。…

⋮

それそれ胡弓ひきがひきだしたよ、おききな。

だれにくらびょうか、めったにまたなかろ、

コオル王さまとその胡弓ひきよね。

雨、雨、いっちまえ

雨、雨、いっちまえ、
またいつかきなよ、
はよでてあアそぼに。

花壇にぶた

お庭の花壇にぶたがでた。
それいってとっつかめ。
小麦の畑（はたけ）にうしがきた。
はしれ、はしれ、男の子。

クリイムのおなべにねこがいる。
はしれ、はしれ、女の子。
山火事だ。

はしれ、はしれ、男の子。

日の照り雨

日の照り雨（あアめ）、
小半時（こはんとき）もてぬ。

いばらのかげに

いばらのかげに、
ひもじさ、　さむさ。
花さくかげに、
白金（しろがね）、　黄金（こがね）。

セント・クレメンツの鐘

のぼれいそいそ、またおりなされ、
鐘はロンドン、つけば数ござる。

「オレンジにレモン」
セント・クレメンツの鐘がなる。

「標的（まと）と、標的（まと）の星」
セント・マアガレッツの鐘がなる。

「煉瓦（れんが）に瓦（かわら）」
セント・ギルスの鐘がなる。
「半（ハアフ）ペンスに*ファシング」
セント・マアルチンスの鐘がなる。
「パン菓子におせんべい」
セント・ピイタアスの鐘がなる。
「二本の枝、　一つのりんご」

ホワイト・チャペルの鐘がなる。
「灰かき、火ばし」
セント・ジョンスの鐘がなる。
「湯わかし、おなべ」
セント・アンヌスの鐘がなる。
「バルドペエトじいさんよう」
オルトゲエドののろい鐘。

「おまえに十シルリング貸しがある」
セント・ヘレンズの鐘がなる。
「いイつはろうてくれるんじゃ」
ふるいベエレエの鐘がなる。
「おいらが金持ちになったらな」
ショルジッチの鐘がなる。
「そしたらたのむよ、そのときは」
ステプニイの鐘がなる。

「おれんしったこつかい」と
ボウの大きな鐘の声。
さあきた、手燭がお床へおまえをてらしにきた。
さあきた、首切り役人がおまえのそっ首ちょんぎりに。

＊　ファシングは一ペンニイの四分の一。

おうまのり

レディのうまのりゃ、
ツリイ、ツレ、ツレエ、
ツリイ、ツレ、ツレエ。
レディのうまのりゃこんなもんよ、はい。
ツリイ、ツレ、ツレエ。ツリ、ツレ、ツレエ。

ゼンツルマンのうまのりゃ、
ガロップ・エ・ツロット。

ガロップ・エ・ツロット。
ゼンツルマンのうまのりゃこんなもんだ、ほい。
ガロップ・エ・ツロット、ガロップ・エ・ツロット。

おひゃくしょうのうまのりゃ、
ホップルデイ・ホイ、
ホップルデイ・ホイ。
おひゃくしょうどんのうまのりゃこんなもんじゃ、はあ。
ホップルデイ・ホイ、ホップルデイ・ホイ。

小径（こみち）にむすめ

小径（こみち）のほとりにひとりのむすめが、
なんだかいってるけど、はっきりゃいえないで、
ぐっつ、ぐっつ、ぐっつぐつ。

むこうの小岡にひとりの男が、
たってはいれども、じっとしちゃいられず、
ひょっこり、ひょっこり、ひょっこりしょ。

月の中の人

月の中の人が、
ころがっておちて、
北へゆく道で、
南へいって、
凝(こご)えた豌豆汁(えんどうじる)で、
お舌をやいてこォがした。

十人のくろんぼの子供

十人よ、くろんぼの子供が十人よ。
おひるによばれてゆきました。
ひとりがのどくびつまらした。
そこで、九人（くにん）になりました。

九人（くウにん）よ、くろんぼの子供が九人（くウにん）よ。
どの子もどの子もあさねぼうで、
ひとりがとうとうねすごした。

そこで、　八人になりました。

八人よ、　くろんぼの子供が八人よ。
いっしょに＊デボンを旅してて、
ひとりがとちゅうでとどまった。
そこで、　七人（しちにん）になりました。

七人よ、　くろんぼの子供が七人よ。
木ぎれきりにとみないって、
ひとりがまふたつに腹きった。
そこで、　六人になりました。

六人よ、くろんぼの子供が六人よ。
はちの巣いじって、かまってて、
ひとりがくまんばちにさアされた。
そこで、五人になりました。

五人（ごォにん）よ、くろんぼの子供が五人（ごォにん）よ。
けんかしてお訴訟をおォこした、
ひとりが裁判所へゆきました。
そこで、四人になりました。

四人(よォにん)よ、くろんぼの子供が四人(よォにん)よ。
みんなで海へとでかけたら、
赤いにしんにひとりがのォまれた。
そこで、三人(さんにん)になりました。

三人よ、くろんぼの子供が三人よ。
こんどは動物園へいったれば、
くまめがひとりをひん抱(だ)いた。
そこで、ふたりになりました。

ふゥたりよ、くろんぼの子供がふゥたりよ。

かんかん日だまりィすわりこみ、
ひとりがちぢれてやけしんだ。
そこで、ひとりになりました。

ひィとりよ、くろんぼの子供がひィとりよ。
いよいよ、たったひィとりよ、
その子がお嫁とりにでていった。
そこで、だァれもなくなった。

＊　デボンはイギリスの西南部の一県で、デボンシイルのことです。

お月さまの中のおひとが

お月さまの中のおひとが、
お月さまの外をながめて、
そして、こうおっしゃるわ。
いま、いま、わたしはおきかかる。
赤子(ねんね)のみんなはいまお寝(よ)る。

クリスマスがきますわい

右や左や、クリスマス。
がちょうがふとってめえりやす。
どうぞや一（いち）ペンニイ、
じいめが帽子にほうりこんでくだされ。
一ペンニイがおいやなら半ペンニイでもようござる。
半ペンニイでもないならば、
ごきげんよろしゅう、だんなさま。

べああ、べああ、ブラック・シイプ

べああ、べああ、ブラック・シイプ
おまえはいい毛をおもちだろ。
はい、はい、ふくろに三（み）ふくろございます。
だんなさまに一（ひと）ふくろ、
おくさまに一ふくろ、
だっけど、そこらの細道で、
べそかくぼっちゃんにゃ、いィやいや。

ろうそく

ちびこ、
なまえはナンシイ・エッチコウト、
白いペッチコウトに
赤い鼻もって、
ながくたってるほど、
みじかくなってしまう。

ちっちゃなテイ・ウイ

ちっちゃなテイ・ウイは海へゆき、
たななしボオトにのりこんで、
ゆらゆらゆられているうちに、
ちっちゃなボオトがひっくりかえり、
これでお話もおォしまい。

三月、風よ

三月、風よ。
四月は雨よ。
五月は花の花ざかり。

お面もち

グレゴリイ・グリッグスさんは、
グレゴリイ・グリッグスさんは、
二十と七つのお面(めん)もちでおじゃって、
とっかえ、ひっかえ、ひっかえ、とっかえ、
街(まち)じゅうをやんやとわらわせる。
東へいっちゃひっかぶり、
西へいっちゃひっかぶり、
それでも、どの面がいちばんおすきか、

やっぱり御本人でおいいやれぬ。

ししと一角獣（いっかくじゅう）

ししと一角獣（いっかくじゅう）と
ふたりで王位をせりあった。
ししがつよかったで、
街を上下（うえした）おおあばれ、
そこで、白パンやったり、
黒パンやったり、
乾葡萄（プラム）入ケイキやったり、
やっとこすっとこおいだした。

くつやさん

くつやさん、　おうち。
はい、　はい、　こんにちは。
おくつのつくろいたのみます。
よしきた。　合点(がてん)だ。
こちらに一釘(ひとくぎ)、　そちらに一釘、
とんとんとんとんのとん。

きれいなくびまき

ジイニイ、むすびにきとくれよ。
ジイニイ、むすびにきとくれよ。
ジイニイ、むすびにきとくれよ。
　わたしのきれいなくびまきを。

わたしはうしろでむすんでよ。
わたしは前(まアえ)でむすんでよ。
わたしは何度もむすんでよ。

もうもうわたしはかまやせぬ。

何人何びき何ぶくろ

セント・イブへとわしがおまいりするときに、
わしがあったは男ひとりにおかみさんが七人(しちにん)、
そのどのおかみさんもふくろを七つ、
そのどのふくろにもねこめが七つ、
そのどのねこにもこねこが七つ。
セント・イブへとおまいりするのが、
さてさて、何人(なんにん)何(なん)びき何ぶくろ。

のむもの

世界が一つのパイなら、
海がすっかりインキなら、
木がまたチイズとパンならば、
おれたちののむものそりゃ、なんだ。
それこそ甲羅（こうら）経（へ）たじじいめでも
頭をかかえてちょいとまいろ。

ちびねこ、さんねこ

「ちびねこ、さんねこ、かわいの子、
どこへおまえはいってたの」

「あたいはいってたの、ロンドンに、
おめみえしたのよ、女王さまに」

「ちびねこ、さんねこ、かわいの子、
そこでおまえはなにしたの」

「そうそ、玉座のおいすもと、
ねずみをちょろまかつかまえた」

雨もよう

いぬとねことがお友達にあいに、
ちょいと、街（まち）からつれだってまいる。
ねこがもうします。
「お天気はどうでしょね」
いぬがもうします。
「さようさ、おくさんえ、雨がふりそでござんすが、
御心配はいりません、てまえがこうもり傘（がさ）もってます
でな。

そのときやごいっしょに、相合傘（あいあいがさ）とはいかがでしょ」

ポウリイ、やかんを

ポウリイ、やかんをかけときな。
ポウリイ、やかんをかけときな。
ポウリイ、やかんをかけときな。
　みんながのむんだ、お茶アだよ。

スケイ、そいつをおはずしな。
スケイ、そいつをおはずしな。
スケイ、そいつをおはずしな。

みんながもうもう行(い)っちゃうぞ。

南瓜（パンプキン）ずき

ペエタアさん、ペエタアさん、南瓜（パンプキン）ずき、
女房もってもお守（も）りができず、
南瓜（パンプキン）の殻（から）にと、どしこんで、
やっとこ、ほくほくお守りした。

ぼう、うぉう、うぉう

ぼう、うぉう、うぉう、
おまえさんどこのいぬ、
わたしゃティンカアさんのいぬですよ、
ぼう、うぉう、うぉう。

三百屋（さんびゃくや）

トムミイ・ツロットさん、三百屋（さんびゃくや）、
ベッドを売って、
わらの上へごろりよ。
そのわら売って、
草の上へごろりよ。
そしておかみさんに姿見鏡（すがたみ）一つ買（こ）うてくりょ。

お釘（くぎ）がへれば

お釘（くぎ）がへれば、
蹄鉄（かなぐつ）うせる。
蹄鉄（かなぐつ）へれば、
おうまがうせる。
おうまがへれば、
のりてがうせる。
のりてがへれば、
戦（いくさ）がうせる。

戦(いくさ)がないと、
王さまのお国やうせる。
おうまの蹄鉄(かなぐつ)がへったせいでよ。

二十四人の仕立屋

二十四人の仕立屋が
ででむしころしに、えっさっさ。
めったにしっぽにゃふれまいぞ。
そりゃこそででむしが角（つの）だした、
ちっちぇえカイロうしそっくりだ。
にげにげ、にげなきゃいまにもころされる。

ででむし角だせ

ででむし、ででむし、角だせや、
お父（とう）さんもお母（かあ）さんもしんでしもうた。
おまえの御兄弟姉妹（ごきょうだい）は裏（うら）ん口（くち）の庭で
パンをおくれェと乞（こ）うている。

お針みつけたら

お針みつけたらつまみあげておとりな。
その日いちんちいいことばかり。
お針みつけてそのまましときゃ
その日いちんちわるいことばかり。

風よ、ふけ、ふけ

風よ、ふけ、ふけ、
ひきうすまわせ、
粉屋粉ひき、
パンやさんがこねて、
朝はほやほやふかしたて。

気軽な粉屋

気軽な粉屋が
デイ河（かわ）にござる。
朝から晩まで
はたらいちゃうたう。
ふざけてばっかり、
一つことばかり、
おきまり文句で
一つことばかり。

『だれにかまうもんか、いやいや、わたしゃ、よ。
だれがかまうかよ、このわしに。ホイソラ、ホイソラ』

いなかっぺえ

いなかっぺいのおたずねだ。
『いちごが何本海にある』
うまく返事をしてのきよか。
『何匹（なんびき）にしんが森にいる』

おかごのばあさん

おばあさんがひとりおかごにのって、
ふらふらあがる。
月よりたかく、　九十倍（くじゅうばい）もたかく、
どこへゆくのか、　きこうにもきけず、
お手々にほうきをもって、　あれあれあがる。
『おばあさん、　おばあさん、　おばあさん、
どこへゆくの、　どこへ、
そんなにたかくあァがって』

『円天井（まるてんじょう）のすすはきじゃ』
『はアやくかえってちょうだいよう』
『あい、あい。ちょっくら、いますぐだ』

すっとんきょうな南京さん

すっとんきょうな南京さんがお三かたござった。
それは皆さまとくより御承知だ。
きゃっきゃさわいで猟にとでかけた。
しかも、めっそうもない、安息日にでござる。
永のいちんち、猟をしてまわり、
これというもの根っから葉っからみつからない。
一つみつけたは帆かけた船よ。

それが追風(おって)にしゅっしゅっとはしった。
「あれは船だ」と一番さきのがいいだした。
「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。
「あれは家(うち)さ」と三番目のがいいのけた。――
「こわれ煙突(えんとつ)までとっついてるじゃないかいな」

永(なが)の一晩(ひとばん)猟(かり)をしてまわり、
これというもの根っから葉っからみつからない。
一つみつけたはおすべり屋のお月さんだ、
それがふかれてつるつるつるとすべった。

「あれはお月さんだ」と一番さきのがいいだしした。
「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。
「あれはチイズさ」と三番目のがいいのけた。——
「二つわりにしたその半分きりさね」

またもいちんち猟(かり)をしてまわり、
これというもの根っから葉っからみつからない。
一つみつけたは木いちごやぶのはりねずみ。
それをうしろにとおりすぎてしまう。

「あれははりねずみだ」と一番さきのがいいだした。
「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。
「あれは針さしさ」と三番目のがいいのけた。——
「よくもめちゃくちゃにお針をさしたもんだすな」

またも夜っぴて、猟をしてまわり、
これというもの根っから葉っからみつからない。
一つみつけたはかぶら畑（ばたけ）の野うさぎだ。
それをみすててまたいってしまう。

「あれは野うさぎだ」と一番さきのがいいだした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。
「あれはこうしさ」と三番目のがいいのけた。――
「あいつ、めうしにおきざりされたやつだんね」

またもいちんち、猟をしてまわり、
これというもの根っから葉っからみつからない。
みたは洞木(うろぎ)の分別顔(ふんべつがお)のふくろうよ。
それをうしろにまたいってしまった。

「あれはふくろうだ」と一番さきのがいいだした。
「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはじじいさ」と三番目のがいいのけた。――
「それそれごましお頭の髪の毛をみさいな」

鼻まがり

あいつぁよっぽどみょうだ、まっすぐにゃゆかぬ。
そのわけしってるか、
鼻のむいたほうへむいてゆく。
どうりで、やっこさん、鼻まがり。

あの丘のふもとに

あの丘のふもとに
おばあさんがござった。
もしも去（い）なんだら
まだ住んでござろ。

あたいのめうし

あたいのめうしはちっぽけだ。
　ひょろひょろ、ひょっこりよ。
あたいのめうしは、ちっぽけだ、
めうしのふくらはぎはちっぽけだ。
　ひょろひょろ、ひょっこり、ひょっこりよ。
あたいのお歌はまだなかば。
あたいのめうしはちっぽけだ。

ひょろひょろ、ひょっこり、ひょっこりよ。
あたいのめうしはちっぽけだ。
やっとこうし小屋へおいこんだ。
ひょろひょろ、ひょっこり、ひょっこりよ。
そこでお歌もちゃんちゃんだ。

ゆりかごうた

ねんねや、　ねんねや、　おねんねや、
ぼうやがお父（とう）さんひつじ守（も）り。
お母（かあ）さんはねんねのねむりの木、
ねんねやねんねとゆすりましょう、
ゆすればお夢がふりかかる。
ねんねや、　ねんねや、　おねんねや。

こびっちょの子供は

こびっちょの男の子はなんでつくる、なんでつくる。
こびっちょの男の子はなんでつくる。
かわずとででむしとこいぬのしっぽでつくられた。
それそれ、こびっちょの男の子がつくられた。

かわいい女の子はなんでつくる、なんでつくる。
かわいい女の子はなんでつくる。
おさとうに薬味（やくみ）に、あまいものずくめ。

それぞれ、かわいい女の子がつくられた。

ねんねこうた

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。
なアいてお母さんをなかすなや、
なかれりゃわたしもつろござる。
ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

はしっこいジャック

はしっこいジャック、
すばやいジャック、
ろうそくたて一つ、
ジャックが
とびこした。

でむし、でむし

でむし、でむし。
ぬすっとがくるぞ、おめんちの壁を
ぶっこわしにくるぞ。
でむし、でむし。
その角だせよ。
ぬすっとがくるぞ、小麦をとりに、
ぬすっとがくるぞ、夜あけの四時に。

一列（いちれつ）こぞって

一列（いちれつ）こぞって、
弓をひき、
おはとを射ったら、
からすめをころした。

でむし

でむし、でむし、角だせや。
パンとお麦を、それ、あげよ。

おりこうさん

とてもがむしゃら、おりこうさん、
いきなりばんばら藪(やぶ)へとびこむと、
眼玉(めだま)がポンポンひんむけた。

おやおやっ、眼玉がつん出たら、
それこそこんどはくそ力、
横っちょの小藪へとびこんだ。
そしたら眼玉がすっこんだ。

おしゃべり

やまがらのおしゃべり、
お舌（した）がさけよぞ。
町じゅうのいぬが
ちんぢんにかんじゃうぞ。

ハアトのクイン

ハアトのクインが饅頭（タアト）をつくられた。
みんなできたよ、夏の日いっぱいかァかった。

ハアトの兵士（ネイブ）が饅頭（タアト）をぬゥすんだ。
こいつしめたとそっくりもってにげてった。

ハアトのキングが饅頭（タアト）とおっしゃった。
そりゃこそたいへん、兵士（ネイブ）を御折檻（ごせっかん）なすった。

ハアトの兵士（ネイブ）が饅頭（タアト）をかえした。
まっぴら閉口（へいこう）して、もうもういたしません。

コケコッコおどり

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
おくさんがおくつをなァくした。
だんなさんがヴァイオリンの弓をなくし、
どうしていいのかおおよわり。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
おやおや、おくさんどうなさる。
だんなさんがヴァイオリンの弓をさがす、

それまで、はだしでおおどりか。
コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
おくさんがおくつをなァくした。
だんなさんがヴァイオリンの弓をみつけ、
それきた、コケコッコ、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
さあさあ、おくさん、それおどろ。
だんなさんがヴァイオリンの弓をこすり、
それそれおどれと、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。
おくさんがおくつをなアくした。
ねてもねられずおおよわり、
頭の髪毛（かみげ）もめっちゃくちゃ。

でんでんむしむし

でんでんむしむし、
角ひけよ。
ひかなきゃ山椒（さんしょ）の粒（つぶ）ふりかける。

おばあさんとむすこ

ひとりのおばあさんと三人のむすこ、
ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。
ジェリイは首くくった。ジェムスはおぼれた。
ジョンはどこかへいなくなってしまった。
だアれもみつけたものがない。
三人のむすこがみんなしんでしまった。
ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。

てんとうむし

てんとうむし、てんとうむし、
はよう家(うち)へかえれ、
おまえの家(うち)や火事だ。
みんな子供がやけしんだ。
むすめのアンヌがたったひとり、
プッジングのなべの下に
つんぐりむんぐりもぐった。

あったかいパン

あったかいパン、
あったかい、あったかい、あったかいパン。
一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、
あったかいパン。
おまえにむすめがないならば、
おまえのむすこにおあげなえ。
一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、
あったかいパン。

ゴットハムの三りこう

さてもゴットハムの三りこう、
おわんにのっかって海へでた。
もそっとおわんがしっかりさえしてりや、
ここらでこの歌もきれやしまい。

気ちがい家族

気ちがいの御亭主に、
気ちがいのおかみさん、
気ちがい小路（こうじ）に住んで、
三つ児をうんで、
どの児もどの児も気がちごた。
お父さんが気ちがい、
お母さんが気ちがい、
みんな子供が気ちがい。

気ちがいうまにのって、
いっしょくたに、みんなのって、
まっくら三宝（さんぼう）に、かけてった。

ちっちゃなだんなさま

あたいのちっちゃなだんなさま、
拇指(おやゆび)よりかもまだちさい。
こまめのおつぼにちょいといれて、
どんがどんがはやしてせりあげよ。

ちっちゃなおうまも買(こ)うてあぎょ。
そして、とっとかけさして、
たづなとらせて、くらおいて、

さあさ、　ねりだそ、　町の外。

かわいいくつした結（いわ）くなら
それにはちっちゃなとめ金具（かなぐ）、
ちっちゃなお鼻をふきゃるには
かわいいちっちゃなハンカチフ。

一つのたるに

一つのたるに、三人はいり、
どんどこ、どんどこ、すっどんどん。
あいつらだれだ。
肉屋にパン屋、
ろうそく屋の亭主。
つっころがしてしまえ。
しようのねえやつらだ。

ジャックとジル

ねんねの小鳥が岡(おか)に二羽、
一羽がジャックで、ほかのがジルよ。
とんでったジャックが、
とんでったジルが、
またきたジャックが、
またきたジルが。

トムトムぼうず

トム、トム、トムぼうず、
笛ふきのむすこ、
ぶたをぬすんでにげたはよいが、
ぶたはたべられ、トムぁぶったたかれ、
ないておんおん街をかけた。

いぬはぼうおう

いぬはぼうおう、
ねこはみゅうみゅう、
おぶたはぐるんぐるん、
ねずみはすけえく。

ふくろはつうふう、
からすはかうかう、
めがもはくゎっくくゎっく、

うしもうもう。

ちいさなおじょっちゃん

額（ひたい）のまんなかに、きらきらちぢらした
ちいさなまきげの、
ちいさなおじょっちゃん、
ごきげんいいときや、
それはそれはいい子で、
おわるいときにはこオわい子。ソレ、こオわい子。

やぶ医者

やぶ医者のフォスタアさんが、
グロオスタアへいって、
にわか雨にあって、
水たまりに立ち往生して、
おへその上まで水びたり。
それから二度とはようゆかぬ。

きれいずきのおかみさん

お月さんのおとりもちでお嫁にござった。
きれいずきの、　世帯（しょたい）もちの、　しまりやのおかみさんだ。
おひるにでもならなきゃなんとしてもおきない。
ほんとにしまるなら、　それこそたのむよ。
やっとこさとおきればおもいきってせかせか、
きれいずきの、　世帯もちの、　しまりやのおかみさん

だ。
灰かきで麦っ粉をやっさもっさこねます。
ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

ながぐつにどろどろどしこんだバタをよ、
きれいずきの、世帯もちの、しまりやのおかみさん
だ。
ひっかき棒のかわりにお足でべっちゃべっちゃ。
ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

チイズは台所の物置のおたなに、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやのおかみさんだ。
ひとりでにころげるまでうっちゃっちゃってかまわない。
ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

御婚礼

ぶうん、ぶうん、ぶうぶうぶ。
はえがくまんばちにお嫁いり、
いよいよ教会へいきやして、首尾よく御祝儀あいすん
だ。
はえとくまんばちの御婚礼。

タッフィ

タッフィはウェルス人、タッフィはどろぼう。
わたしの家（うち）にやってきて、牛肉一塊（ひとくれ）ぬゥすんだ。
タッフィの家（うち）へいったらば、タッフィはいなかった。
タッフィがやってきて、髄骨（ずいこつ）一本ぬゥすんだ。
タッフィの家へいったらば、タッフィはいなかった。
タッフィがやってきて、こんどは麺棒（めんぼう）ぬゥすんだ。
タッフィの家へいったらば、タッフィはねていた。
そこで火棒（ひかき）とって、そいつの頭になげつけた。

ばばァ牛

黒白まだらの御面相は、
チャアレエ・ワアレエの女郎牛（めろうし）だ。
その木戸あけねえか、おとおりじゃ。
チャアレエ・ワアレエのばばァ牛。

とっぴょくりん

とっぴょくりんのとん吉が、
とっぴょくりんのとん吉が、
おまんじゅうをいただいて、
そとがわだアけのォこした。

卵うりましょうと

卵うりましょうと、　わしがゆく道で、
でおうた、　でおうたよ、　ねじれ足とでおうた。
足はねじれ足、　爪(つめ)まがり爪(づめ)、
こいつおもしろいとかかとをちょいとすくう、
そこで、　すとんと地べたに小鼻をぶっつけた。

かささぎが一羽よ

かささぎが一羽よ、なしの木にとォまった。
かささぎが一羽よ、なしの木にとォまった。
かささぎが一羽よ、なしの木にとォまった。
おおしんど、ああしんど、おおしんどよう。

うれしそに一度よ、ちちんがちんとはねた。
うれしそに二度よ、ちちんがちんとはねた。
うれしそに三度よ、ちちんがちんとはねた。

おおしんど、おおしんど、おおしんどよう。

これ、これ、こいきな

「これ、これ、こいきなおむすめご、
おまえはどちらへおいでです」
「お乳しぼりにまいります」
「これ、これ、こいきなおむすめご、
わたしもいっしょに行てあぎょか」
「ええ、ええ、そんならうれしいわ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、
おまえのお父さんはなになさる」
「わたしのお父さんはおひゃくしょうよ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、
おまえさんに財産(おたから)ありましょね」
「いえ、いえ、御器量(ごきりょう)が財産(おたから)よ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、
そんならお嫁さんにゃちとこまる」
「いらぬおせわでござります」

市場（いちば）へ、市場へ

市場（いちば）へ、市場へ、乾葡萄（プラム）入ケイキかいに、
かえろよ、かえろよ、市場にゃおくれた。
市場へ、市場へ、乾葡萄（プラム）入パンかいに、
かえろよ、かえろよ、市場ははねた。

数学

掛け算はしちめんどう、
割り算は因業(いんごう)、
比例は人なかせ、
応用問題気がちがう。

眼（め）

青い眼（め）はきれい、
灰色の眼は陰気、
黒い眼は腹黒、
鳶色（とびいろ）眼玉はおばァけ。

五月のみつばち

五月のみつばちや、
乾草（ほしくさ）一駄（いちだ）よ。

六月のみつばちや、
銀のさじとおなじ価（ね）よ。

七月のみつばちや、
はえの一匹にも、つっかわぬ。

朝のかすみ

朝のかすみと夕焼け空は、
日和（ひより）よいとの前しらせ。
くもる日ぐれと朝焼け空は、
お寝（よ）るひつじをみなぬらす。

かっこ鳥

きれいな小鳥、　かっこ鳥、
とびとびうたうかっこ鳥、
ないてしらするその声は、
つゆうそのないいいしらせ。

小鳥の卵するするゆえ、
なく音（ね）すずしいかっこ鳥、
はやもなきます、　かっこうと、

夏がもうじきまいります。

豆こぞう

豆んちょの家（うち）の、
豆んちょのこぞうっこ、
よその養魚池（かいぼり）へおしかけて、
魚（さかな）をぴんぴとつりあげた。

ソロモン・グランディ

ソロモン・グランディは、
月曜日にうまれて、
火曜日に洗礼うけ、
水曜日に嫁とったが、
木曜日には病気になり、
金曜日にずんと重（おも）って、
土曜日におっ死（ち）ぬちゅうと、
日曜日にはうめられた。

ソロモン・グランディの御一代。
そこでおしまい、ちゃアんちゃん。

かえるの殿御（とのご）

お池にござるはかえるどの、
お池にござるはかえるどの、
はつかねずみは粉小屋（こなごや）に。

相手ほしやのかえるどの、
相手ほしやのかえるどの、
でんでんむしの背中にうちのって。

はつかねずみのお宿（やど）まで、
はつかねずみのお宿まで、
そこで戸たたく、ものもうす。

「はつかねずみのお姫（ひぃ）さま、わたしゃ其様（そさま）にあいにきた、
はつかねずみのお姫（ひぃ）さま、わたしゃ其様（そさま）にあいにきた、
お気にめしたか、めすまいか」

「なんとお返事いたさりょうに、
なんとお返事いたさりょうに、

まして叔父様（おじさ）のるすのうち」

ねずみの叔父御（おじご）がもどられて、
ねずみの叔父御（おじご）がもどられて、
「だれかみえたぞ、るすのうち」

「いやな殿御（とのご）がござんした、
いやな殿御（とのご）がござんした、
叔父様（おじさ）のおるすにござんした」

そこでなきなき、かえるどの、

なきなき、小川をかえるどのの、
めがものお上臈（じょうろう）とであわしゃる。
よいものみつけた、ござんなれ、ござんなれ、
めがものお上臈（じょうろう）に、かえるどの
ぱくとのまれてきゅうきゅうきゅう。

さてもあわれな物語、
ここらあたりで、あなかしこ。

一切空

一切空（いっさいくう）ちゅうおばあさんがどこかしらにござった。
豆っちょろのお家（いえ）におさまりかえってござった。
そこへだれだかぬうとでて、
かっと口あけ、すう、ぱくり。
お家（うち）もおばあさんも一切空。

ロンドン橋

ロンドン橋（ばし）がおちた。
ロンドン橋がおちた。

なんでこんどかけるぞ。
なんでこんどかけるぞ。

銀と金とでかけてみろ。
銀と金とでかけてみろ。

銀も金もぬすまれた。
銀も金もぬすまれた。

鉄と鋼鉄とでかけてみろ。
鉄と鋼鉄とでかけてみろ。

鉄でも鋼鉄でもへしまがる。
鉄でも鋼鉄でもへしまがる。

材木と粘土とでかけてみろ。

材木と粘土とでかけてみろ。
材木、粘土はながされる。
材木、粘土はながされる。

そんなら石でかけ、そりゃ丈夫（じょぶ）だ。
千年万年大丈夫（だいじょぶ）だ。

世界じゅうの海が

世界じゅうの海が一つの海なら、
どんなに大きい海だろな。
世界じゅうの木という木が一つの木ならば、
どんなに大きな木であろな。
世界じゅうの斧（おの）が一つの斧なら、
どんなに大きな斧だろな。
世界じゅうの人たちがひとりの人なら、
どんなに大きな人だろな。

大きなその人がおおきな斧をとって、
大きな木をきり、
大きなその海にどしんとたおしたら、
それこそ、どんなにどんなに大きい音だろな。

空はじめじめ

空はじめじめ、
雨もよい、
ちっちゃなおじいさんにでおうたら、
身ぐるみ革（かわ）きて、
あごに無縁帽（シャッポ）つんだして、
「おさむう、　おさむう、　こんにちは」
空はじめじめ、

おわかれと、
よぼよぼなかまが手をにぎり、
身ぐるみ革きて、
あごに無縁帽（シャッポ）つんだして、
「さよなら、さよなら、またいつか」

アアサア王

アアサア王の御治世（ごじせい）じゃ、
アアサア王はよいかたで、
挽割（ひきわり）麦三斤（さんぎん）ぬゥすんで、
袋形（ふくろなり）のプッジングをこさえよか。

いよいよ王さまのお手製で、
それには山もり乾（ほし）ぶどう、
拇指（おやゆび）二つよりかまだふとい

脂肉（あぶらにく）を二塊（ふたきれ）どしこんだ。

王さまとおきさきとがまずめして、
つぎに大臣たちがおしょうばん、
そしてその夜のおあまりは、
翌朝（よくあさ）おきさきが油揚（あぶらあ）げ。

がぶがぶ、むしゃむしゃ

どうしたことだえ、このおばば、
のんだりくったり、そればかり、
ほかにはなんにもようせぬで、
くうのとのむのが商売かい、
むしゃむしゃ、がぶがぶ、ぐずりばば、
ぶつぶつぶつぶつぶつまだやめぬ。

天竺（てんじく）ねずみは

天竺（てんじく）ねずみは追っかけごっこがだいすきだ。
　ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。
捕（とら）よとおもうならまず駈（か）けた、
それ手をはなした、
どっちがはやいか。
　ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

ジャック・スプラットと

ジャック・スプラットとその嚊(かか)さ。
じいさはたべてもやせこけだ、
ばばさはふとっても意地汚(いじぎた)だ。
ふたりの間中(あいなか)を、　ちょとごらん、
お皿はすべすべなめてある。

背骨(せぼね)まがり

背骨(せぼね)まがりのあまのじゃく、
背骨まがりの旅をして、
背骨まがりの石段で、
背骨まがりの六ペンスをひろい、
背骨まがりのねこを買い、
背骨まがりのねずみをとらせ、
背骨まがりの豆んちょの家(いえ)に、
背骨まげまげおさまった。

（注）あちらでは、つむじまがりのことを背骨まがりと申します。

おらがお父（とと）は

おらがお父（とと）はおっ死（ち）んだ。
何（あん）といってええだが、こちゃしらぬ。
うまを六匹くんさんし。サテ、
犁（すき）でもってすけちゅうだ、おえちゅうだよ。

うまを六匹売っとばし、
めうしを一匹、こちゃ買ってな、
一身上（ひとしんしょう）あんべとごきげんだ。サテ、

何(あん)としてええだが、　まだしらぬ。

そこでめうしを売っとばし、
ふくらはぎを一本、　こちゃ買ってな、
一身上あんべとごきげんだ。　サテ、
極上肉を半ぺら、　またなくす。

そこでふくらはぎを売っとばし、
めねこを一匹、　こちゃ買ってな、
あまっちょのねこめも愛(う)いやつじゃ。　サテ、
煙突(けむだし)のすみっこに、　ちょんとすわる。

またまたねこめを売っとばし、
はつかねずみを、こちゃ買ってな、
尻尾（しっぽ）つまんで火になげた。サテ、
おらのお家（うち）がぼうともえた。

ねこと王さま

さてもこのたび、ねこが王さまに御拝謁（ごはいえつ）、
ごぶじにおさまりや、しあわせだ。

がアがア、がちょう

がア、がア、がちょう、
うろついてどこいこ、
階上(かいじょう)を、下(した)を、
おくさまのへやで、
じじいにであった、
そのじじいどうした、
不信心(ぶしんじん)ないやなやつ、
そこで、そいつの左の足をすくって、

すってんころりとあがり段からころがした。

火の中に

火の中に石脂(タアル)、
樫(かし)の中にはすっからかん。
泥(どろ)の中(なアか)にうなぎ、
粘土の中にはすっからかん。
やぎが蔦(つた)くう。
めうまが麦くう。

火ばしの一対

足なが、せむし、
小頭（こあたま）、眼（め）なし、
それなアに。

お月さま光る

おじょっちゃん、　おぼっちゃん、　外へでてあすぼ、
お月さま光る、　昼のようにあかる。
口笛ふいてきなよ、　よばわってきなよ。
上々きげんででてきなよ。　でなけりゃおことわり。
夕飯（ゆうめし）うっちゃって、　石盤（せきばん）うっちゃって、
街へでてきなよ、　あそびなかまがまっているに。
ときの声あげて、　とんだりはねたりしておいで、

お月さまの光にぐるぐるまわっておどりましょう。
あがり段にのぼり、　石垣とびおりて、
ころがしゃお銭（ぜぜ）がなにもかもくれる。
牛乳が買える、　はちのみつが買える、
半時（はんとき）たたずにおまんじゅうが買える。

おもちゃのうま

はいしどうどう、
おうまにのって、
チャアリング・クロスへいてみよか。
きれいなレデイが、
白いうまにのって、
お手々に指輪、
おくつに鈴つけ、
ちんからちんからとおる、

それみにいこか。
ちんからちんから、りんりん。

なけなけ

なけなけ、　赤ちゃん、
眼玉にお指をつっこみな。
そしてお母（か）さんへ行ったらば、
あれはぼうやじゃないとおいい。

北風ふけば

北風ふけば、
雪がふろ、
かわいそなこまどりはどうするぞ。
　かわいそなものね。

お倉の 中(なアか) の刈麦(かりむぎ)に、
もウぐりこウぐり、 ぬくもろぞ、
お羽根の 裏(うウら) に首まげて。

かわいそうなものね。

めくら鬼

めくら鬼、　めくら鬼、
めん眼（め）がみえないごぞんじか、
くるくる三遍まァわって、
わたしをつかめてごらんなね、
こオろぶなころぶな、
だれでもいいからとっつかめ。
わたしはこっちだよ、　とっつかまえたとおおもいか。
笑止笑止（しょうししょうし）、　めくら鬼。

お山の大将

みろやい、ひととび、
おりやここだ、
だアれもこれまい、
おれひとり。

上へいった

上へいった、いった、いった。
下へいった、いった、いった。
前へいった、うしろへいった。
ぐるぐるぐるぐるとまァわった。

みんなして森へ

（五つの指のさきをつついてうたう）

一　このぶた申す。みんなして森へ。
二　このぶた申す。なにしに森へ。
三　このぶた申す。お母さんにあいに。
四　このぶた申す。そしてそしてどうするの。
五　このぶた申す。かじりついてキッスしよ、キッスしよ。

このぶた、ちびすけ

（おなじく）

一　このぶた、ちびすけ、市場（いちば）へまいった。

二　このぶた、ちびすけ、お留守番でござる。

三　このぶた、ちびすけ、牛肉あぶった。

四　このぶた、ちびすけ、なァんにももたなんだ。

五　このぶた、ちびすけ、ういういうい。
いっしょにお家（うち）へ、よいところしょ。

おくつをはかしょ

（五つの足をつつきながらうたう）

一　おくつをはかしょ、こうまにはかしょ。

二　めうまにはかしょ。

三　ふくろを背（せな）にのしょ。

四　しょったか、みよよ。

五　しょったら、麦よ。

しょわなきゃ、脳みそぶっつゥぶしょ。

ながい尾のぶたに

ながい尾のぶたに、
みじかい尾のぶたに、
尾のないぶたに、
めぶたにおぶた、
まきじっぽのこぶた。

あァがった、あがった

甲　あァがった、あがった、はしご段を二つ。

乙　ちょうど、わたしのとおりよ。

甲　あァがった、あがった、はしご段を四つ。

乙　ちょうど、わたしのとおりよ。

甲　おへやへはいった。

乙　ちょうど、わたしのとおりよ。

甲　お窓の外（そオと）をなァがめた。

乙　ちょうど、わたしのとおりよ。

甲　そこでおさるをみィつけた。

乙　ちょうど、わたしのとおりよ。

ワン、ツウ、スリイ、
フォア、ファイブ

ワン、ツウ、スリイ、フォア、ファイブ、
魚（さかな）をピンピンつかまえた。
なぜそれにがした。
指をかんだ、手をかんだ。
どっちの指かァんまれた。
この右の小指よ。

顔あそび

殿《との》さま、御着座《おちゃくざ》。（額）
ふたりの御家来《ごけらい》。（両方の眼）
おんどり。（右のほお）
めんどり。（左のほお）
いそいで御入来《ごじゅらい》。（口）
　チンチョッパア、チンチョッパア。
チンチョッパア、チン。（あごをなでる）

このベル

このベルならした。
（髪の毛を一つまみ、ひっぱる）
このドアたたいた。
（額をたたく）
この錠(じょう)はずした。
（鼻をつまみあげる）
さあ、さあ、はいりましょ。
（口をあいて指を中へつっこむ）

足

二本足がすわった、三本足の上に。
一本足をしゃぶった。
四本足（しほんあし）がやってきて、
一本足さらってにげてった。
二本足がとびあがり、
三本足をひっつかみ、
四本足めがけてなげつけた。
そこで一本足をとりかァえした。

（注）一本足は牛の骨、二本足は人間、三本足は腰かけ、四本足は犬。

一番目のお床

一番さきにねた子に金の財布（さいふ）、
二番目にねた子に金の雉子（きじ）、
三番目にねた子に金の小鳥。

おしまい

よぼよぼがらすが
一羽地にとまった。
そこでお謡(うた)もちゃんちゃんだ。

巻末に

「マザア・グウス」の童謡は市井の童謡である。純粋な芸術家の手になったのではなかろう。しかし、それだからといって一概に平俗野卑だというわけにはゆかない。日本の在来の童謡、すなわち私たちが子供のときにいつも手拍子をたたいてはうたったかの童謡はやはり民衆それ自身のものであった。だれのなにがしという有名な詩人の手になったのではない。自然にわきあがってきた民族としての子供の声であった。その中

にはむろん平俗なのもあった、いかがわしい猥雑（わいざつ）なおとなのものもあった。しかしほんとうの子供の声はその中にあった。すぐれて光っていた。これを思わなくてはならない。本来の民謡なるものは、野山の木萱（きかや）のそよぎそのものからおのずとわきでたものである。はじめはだれが歌ったとなく歌いだされて、つぎつぎに歌い伝えられて、歌いなおされて、ほんとうに洗練されたいいものばかりが永く残ることになったのである。で、その長い民族精神の伝統ということについて充分に尊重しなければならない。この意味で日本在来の童謡は日本の童謡の本源であり本流である。「マザア・

グウス」もおなじく英国童謡の本源とみなしていいであろう。こうした民族の伝統ということを考えないで、ただ優秀な詩人の手になるもののみが真の高貴な歌謡だと思うのはまちがいであろう。私はそうした妙な詩人気取りはきらいである。

ほんとうを言うと、民謡とか童謡とかいうものは、たとえそれがある種の詩人の作だったにせよ、その歌謡が一般民衆のものとなった以上、その作者の名は忘れられて、その歌謡だけがすべての民衆のものとなる。そうして残れば残るだけ、その歌謡は民謡として成功したものだといいうる。すなわち作者の名が忘れられ

れば忘れられるだけ、ほんとうの民謡として光あるものであるのだ。

今日「マザア・グウス」の童謡として伝えられているもののうち、グウス夫人の作がむろんすべてであるとは思えぬ。いろいろ作者未詳のもの、子供そのものの声が混入しているにちがいない。グウス夫人の名すらも英国その他の英語本位の国々では忘れられて、子供たちはいわゆるお母さんがちょうの謡だと思っている。読まれるということよりも歌いはやされている。すなわちイギリス民族そのものの童謡となっている。この民衆そのものの歌謡を決して侮ってはならない。

ことにその快活、その機智、その鋭い諷刺（ふうし）、無邪、諧謔（かいぎゃく）、豊潤な想像、それらのたぐいまれな種々相にはさすがに異常な特殊の光が満ちている。むろん、これらの中には純粋な芸術上の立場から見ると、多少の玉石混淆（こんこう）は免れぬ。しかしこれは民謡としての紹介にはしかたのないものである。だから芸術品として見てもずいぶんいいと思うものがある代わり、ずっと品位の落ちたのも少々はある。それにしてもどうにも棄てるには惜しいなんらかの鋭さが蔵されている。で、私は拾った。ただ無批判に手当たり次第に訳したのではない。これでないと「マザア・グウス」の大体がはっき

りしないからである。子供というものはそうビクビクして教育しなくともよい。私は子供の叡智（えいち）を信じている。

私はまたこれらのNursery Rhymesを訳しながら、洋の東西を問わず子供の感情ないし感覚生活ということについてはほとんどおんなじだということに驚かされた。この中の「てんとうむし」のごときは全然日本の「からすからす」の童謡とそっくりではないか。幾つかの「ででむし」の謡（うた）のごとき、またほとんど同じではないか。

ただ、彼においてはきわめて都会的な軽快味とその

縦横無碍（むげ）の機智とにずばぬけている代わり、日本の子守唄のようなほんとにしみじみとしたあの人情味には欠けていはしまいかと思われる。で、私は日本在来の民謡やそうした子守唄のありがたさをつくづくと顧みた。ただここでは委細の比較は読者にお任せする。

私がこの集に訳出したのは「マザア・グウス」の童謡を主として、なお英米児童の間に行なわれている遊戯唄ねんねこ唄その他のものを取り混ぜた。

翻訳するに当たっては四、五種の童謡集、楽譜等をかれこれ参照した。同一の童謡でもいろいろ歌いくず

されたり、抜かしたりしてある。はなはだしいのは肝腎な個所で全然反対の意に変わっているのもある。そういうのは最もいいと信じたものから選択した。この集の序詩のごときはどの本をのぞいてもところどころ抜けていた。で、みんなから綜合してあのとおりにまとめてしまった。しかしどの聯もどの行も私の自儘に作り足したのはない、そのままそろえて完全な一つのものとしたのである。

　元来、翻訳ということはむずかしい。とりわけ韻文の翻訳は難行である。語学者でもなく、学力も乏しい私が、この難事に身を入れることはかなりはばかられ

ることではあるが、ただ幸いに私は詩を作っている、民謡としての日本のことばをどうにか風味してきた。で、詩とか民謡とかについては、その真精神、そのリズムの動き方等にはまずまず相当の理解を持っているつもりである。で、その力を頼りにともかくやりはじめてみたのであった。

第一の困難は、これらの童謡はむろん手拍子足拍子で歌うべきものであるので、訳もまたきわめて民謡風の動律で、全然歌うようにしなければならない。で、原謡のリズムの動き方についてはそのとおりそのままの推移法を必要とする。これを違った国のことばで移

そうとするのはかなり無理なことである。そしてまた歌えるようにするのはなおさらである。

で、ある少数の例外を除いて、私はなるべく一行ずつほとんど逐次に訳していった。大体において逐次訳といっていい。そのおかげて私は創作以上の苦しみをなめた。

もっとも、一昨年あたり、はじめてこのことに着手した当座はまだ不馴れで、充分手に入らなかったゆえに、謡いものとするために多少の手加減をしなければ思うように訳せなかった。それが次第に厳格な逐次訳でどうにか納めていけるようになった。で、この中に

は少数の手加減を入れた例外がある。

それから、Rain, rain go to Spain というような音韻上の引っかけことばのものは訳しようとするのがそもそもの無理であるから訳しなかった。「雨、雨、スペインへ」では原謡のおもしろみがなくなるからである。日本でなら「雨、雨、安房（あわ）へ」というふうにあの韻で掛けてゆくべきものである。

Baa, Baa, Black Sheep というようなのも困った。すべてＢでいっているのであるが、日本の黒羊のくにＢは掛からない。かといって、「くうくう黒羊」でも羊のなき声は出ない。「なけなけ、黒羊」では意味だけの

ものになる。意味だけのものでは、ほんとうの訳にはならないのだ。しかたがなければその言語のまま生きさせるほかに道がない。

「やぶ医者のフォスタアさんが、グロオスタアへいって」というふうのものはこれもことばの上の引っかけであるが、固有の名詞でそのままやれるから、そのとおりにしておいた。「お医者さまの西庵（さいあん）さんが埼玉（さいたま）へいって」というふうのしゃれだ。これは両方が固有名詞でいってるのでそのままでいいが、雨とスペインのごとく、一つが普通名詞である場合はまったく困ってしまう。で、あるものは「とっぴょくりんのチャアレ

エが」と訳しては原謡の妙味が出ない場合に「とっぴょくりんのとん吉が」というふうにとで掛けたのもある。これはとん吉そのものが人名というより、「とっぴょくりん」そのものが通称化されているからさして障（さわ）りにはならないし、チャアレエという人名は原謡にはただ音韻上のしゃれに使用したまでで、それ以上のものでないから本質的の引っかけの妙味を主として訳したのである。しかしこうした例はこれくらいである。

それからまた、

月の中の人が
ころがっておちて、

北へゆく道で
南へいって
凝（こご）えた豌豆汁（えんどうじる）で
お舌をやいてこォがした。

の原謡では「ノルウィッチへいく道をきいて、南へいって」であるが、ノルウィッチはロンドンの北に当たるので、本質の精神は北へが南と対照して、ノルウィッチを知らない日本の子供にははっきりわかるし、このほうがずっと簡潔でいいからである。こんな場合の地名は除けた。しかし、この例もほかにはめったに

ない。たいがい生かすべき固有名詞は生かした。

それからまた、日本語になおす場合に、語法の相違から、動詞の過去を現在格にしたり、そのまま直訳するよりも、かえってピタと本質的にその意に合う日本語がある場合は、その無意味な直訳は避けた。その真精神にそむくばかりでなく、日本語としても生きないからである。

それから、正直に「うまく返事をしてのけた」と訳したでは、かえってその本当の面目が出ない場合は「うまく返事をしてのきょか」というふうにしたのもある。

それからまた、「二十四人の仕立屋がでむしころ

しにいきました」を「二十四人の仕立屋がでてむしころしにえっさっさ」とやったのもある。意は同じでも、えっさっさのほうが一列に、活動人形そのままになって、足がさくさくとおなじに動くからである。

それからみだりがましくてちょっと困るのは多少気品をよくするために手加減したのがある。

で、こういうのは例外であるけれども、それだからといって充分意識してやっているのであるから、詩法を知らぬ語学者から頭ごなしに誤訳呼ばわりをされたくない。

ただ、学力の不足のためか、うっかりしたためにと

んでもないまちがいをしたことがあるかもしれない。そうした条々がもしあればどうか御教示にあずかりたくお願いする。

私はそれらの内容と動律の本質とをわが日本の民謡語であたう限り生かしきろうとつとめた。生かしえたなればありがたい。創作するとほとんど同様の誠意と熱心とをこれに傾けたのもこのゆえである。で、ある意味においては半ば私の創作ともいえよう。

以上

底本：「まざあ・ぐうす」角川文庫、角川書店
１９７６（昭和51）年５月30日初版発行
１９９５（平成７）年１月30日24版発行
底本の親本：アルス版全集
１９３０（昭和５）年
※「＊」は注釈記号です。底本では、直前の文字の右横に、ルビのように付いています。
入力：藤本篤子
校正：八巻美恵
１９９８年１月21日公開
２０１０年11月２日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。